

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：33302

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02270

研究課題名（和文）祭神別神社分布図による諸信仰伝播の過程および背景の研究

研究課題名（英文）Study of Various Faiths on Shrine Distribution Map Devided BY Deity

研究代表者

平泉 隆房（HIRAIZUMI, Takafusa）

金沢工業大学・基礎教育部・教授

研究者番号：20148357

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：祭神別神社分布図、具体的には大山咋神、素戔嗚尊、大山祇神、天照大神（伊勢）、伊弉諾・伊弉册尊、宇迦之御魂（稲荷）、などを手懸りとして検証し、信仰の伝播経路や信仰の広がり具合を検証した。

たとえば、素戔嗚尊を祀る神社の分布図からは、神社名だけをみていたのでは拾えない多くの神社があることを知り得た。素戔嗚尊の神格については古来種々の議論があり、記紀風土記などにも様々にみられ議論が錯綜しているなかで、有力な判断材料となるはずである。大山祇神が実に多くの神社に祀られ配祀されていることは、これまでは、単なる後世の付会として扱われてきたようであるが、新たな一石を投じるものである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の神社名別の研究が見落としてきた、祭神ごとの検証によって、多くの新知見が得られ、引いては日本思想史の一部を書き換えることにつながることを予想される。大山咋神、大山祇神、素戔嗚尊、天照大神そして白山信仰の諸神について、それぞれの分布図を作成した。信仰の広がり具合は一目瞭然である。

素戔嗚尊については、神社名としては八坂神社などではなく、祀られていることを類推するのは困難な地域として中国地方が指摘されているが、それらのかかなりな部分が荒神社であることをつきとめた。従来、単なる付会として考慮すらされなかったようだが、大山祇神を祀る神社6000社ほどの分布図も作成し検討した。

研究成果の概要（英文）： Study of Various Faiths on Shrine Distribution Map Devided BY Deity. The Shrine Distribution Map that as a clue specifically Ohyamakui-no-Kami, Susanoo-no-Kami, Ohyamatsumi-no-Kami, Amaterasu-Ohkami (Ise), Izanagi-no-Mikoto, Izanami-no-Mikoto, Ukanomitama (Inari) etc., validate Faith's propagation path and spread.

For example, I could gather many enshrines Susanoo-no-Mikoto cases, not indicated Shrine's name, from Susanoo-no-Mikoto's distribution Map. The Deity grade of Susanoo-no-Mikoto has been discussed various theories for long Time. We can get influential judgment materials in this study. Regarding Ohyamatsumi-no-Kami which enshrined lots of shrines. The fact treats as adding posterity but I believe to raise a question about it.

研究分野：日本思想史

キーワード：祭神別神社分布図 日吉信仰 山神信仰 神明神社 白山信仰

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究を開始する以前に、6年間科研費の助成を受けて、全国各地に広く鎮座している白山神社・日吉神社の全てを20万分の一地勢図・5万分の一地形図・2万5千分の一地形図上に置いて、その分布傾向を検証してきた。

その結果、白山信仰関連の神社2000社、日吉信仰関連の神社2000社の全てを地図上に確認した。個々の神社には創建以来の由緒や経緯があって、それをたどることは容易でないが、平凡社の地名事典や各県の神社庁等が刊行している神社誌も収集につとめ参照した。延喜式内社が交通の要衝に鎮座していることはこれまでの先学の研究によって明らかであり、そのような交通上の要ともいふべき立地条件の場所に日吉勢力(延暦寺の勢力と表裏一体)が進出することによって、荘園獲得(つまり日吉社領や山門領)を有利に進め、山王信仰の拠点としたことは容易に推測できるところであり、日吉神社(呼称は日吉神社、日枝神社、山王神社など種々ある)の全国分布図をみれば、古代主要街道沿いにこの関連の神社がひろく分布していることが明らかとなった。古代の延喜式内社が衰退したあとに白山勢力や天台系の日吉勢力また山門勢力が入ってきて、中世近世には、むしろ白山社や山王さんなどと称した神社が実に多いことを明らかにした。福井県の三国神社、金沢市の石浦神社(兼六園入口に鎮座)など、当地の著名にして式内社(論社)でもある神社が、江戸期には山王社、石浦山王などと一般に呼ばれていた。このような事例は全国に夥しく見いだすことができた。

北陸道や東山道の美濃国では山門領が多く検出され、延暦寺の勢力が進出する過程で、現地の白山勢力と衝突することなく、協調して勢力の拡張をはかっていたことを突き止めた。東山道では、寺院の中に祀られている日吉堂・白山堂も多く検出され、坂上田村麻呂開創と伝える日吉神社・白山神社があることも確認した。西海道や南海道では修験の霊場とされる場所に白山神社が祀られている事例がいくつも見受けられ、天台系の寺院に日吉信仰そして白山信仰が入ってくるのではないかと推定した。山陽道では書写山、山陰道では伯耆大山、また出雲の鱈淵寺などに白山社や日吉社が現存している。これらのことは、白山信仰や日吉信仰がどのようなものかを暗示しているようでもあり注意が必要であろう。

白山信仰を、一般的には水の信仰だとし、山の信仰だとするが、そのような単純なものではなく、北は東北の岩手県から南は西海道の北九州にわたるまで多く鎮座し、南海道でも愛媛県にはことに多いことなども踏まえた上での信仰研究でなければならないと考える。

科研費によって、一連の神社分布図研究を開始した初期の段階で、五畿七道の古代官道や脇街道、そして中世に盛んに用いられるようになった主要道には注意を払い、これまでの研究成果を踏まえる形で、地形図上に書き込んだ。もちろん細部にわたっては最新の成果とはいえないものも多いが、あくまで参考のためであり、この主要道との距離関係が一目で判定できることは本研究を進めていく上での利点となった。

2. 研究の目的

これまで、神社の祭神に注目し、その祭神を祀る神社の分布図を手懸りとして、神社名によって八幡・伊勢・天神・稲荷などの諸信仰がどのように分布しているかの研究はなされてきたが、祭神別による試みがなされたことは少ない。しかし、明治末年の神社合併策などの結果、神社名が消えている場合が多く、神社名のみによる研究に限界があることは明らかである。

たとえば、石川県(加賀)は神明神社の数が、北陸の他県つまり福井県や富山県と比べて非常に少ない、という見方がある。そして、そのことから、北陸に広く浸透し蟠踞していた白山信仰と衝突したのであり、歴史的にも、白山信仰関係の社寺が江戸期には伊勢御師の現地介入を拒んでいた、という説もある。この理解は完全に間違っている。確かに、神明神社だけの数をみると、福井県が約100社、富山県に至っては680社を数えるのにくらべて、石川県ではわずかに30社足らずであるから、この見解は妥当なようにみえる。しかし、相殿神として天照大神を配祀している神社を加えると、この数は一気に120社にまで増加して、福井県を上回るのである。つまり、明治期になって、神社合併策などによって神明神社が整理され、合併していく中から、たまたま神明神社の呼称が消えただけのことであって、神明神社の信仰、言い換えれば伊勢信仰が希薄であった、とは到底言えないのである。

本研究では、これまでの神社名別の分布図ではどうしてもつかまえにくかった信仰の変遷や、神社名そのものが明治期の神社明細帳の段階で変更され、明治末年の神社合併策によって神社名が消滅してしまった信仰の一面を、祭神名から一気に拾い集めて、場合によっては復元しようと試みたものである。

従来の研究では、明治期後期から昭和前期の『日本帝国統計年鑑』による神社数の県別変遷で大筋を押さえ、県別の差違が非常に大きいことが知られていた。そこから先は、各県別に神社庁が出している場合のある『神社誌』などによって県ごとに現状や来歴を押さえ、それでも不明な神社については神社庁がそれぞれ保管している神社明細帳に丹念にあたるといふ、気の遠くなるような作業が必要となる。

そのような作業のかなりの部分を省略し、祭神別神社分布図を活用して、明治・大正・昭和期の変化も視座にいれながら諸信仰伝播の変遷をたどろうというのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

神社本庁製作・著作『全国神社祭祀祭礼総合調査、平成「祭」データ』を用いて、祭神別に検索すると、神社名ごとに神社所在地を検出することができ、それぞれの神社には、位置情報として東経・北緯のそれが秒単位まで記載されている。この位置情報を、フリーソフト「カシミール3D」(地図ソフト)上で確認し、マークしていった。位置情報が正確に神社本庁に報告されていれば、ほぼ国土地理院発行の20万分の一の地勢図上また5万分の一の地形図、さらには2万5000分の一の地形図上にみられる神社の記号とほぼ一致する。

私(平泉)のこれまでの研究では、主祭神や相殿神(配神)はともかく、境内社としてその神を祀る場合の判断が不十分であり、今回の研究に盛り込むこともできていない。神社それぞれ個々に歴史的経緯のなかで境内社として祀ることとなったとは言えても、それがいつからかを明記した資料なり伝承がない限り、時期を確定することは困難である。境内社となった時期が不明な場合がほとんどで、今回の報告では境内社は一括して考慮外とした。恐らく、各信仰で異なることも予想されるが、数社または数十社を例外として、全体への影響はそれほど大きくないものとする。ちなみに、『全国神社祭祀祭礼総合調査、平成「祭」データ』では境内社としても検索できるので、その数も考慮しながら作業を進めたが、祭神別神社分布図に内容を反映させることはしなかった。

近時、『スサノオ信仰事典』(戎光祥社)のように各信仰を総体的に集成しているものがあり、所収論文のなかには全国的な信仰分布に言及しているものがある。以前より定評の高い民衆宗教史叢書(雄山閣)ともども、十分参照するように心懸けた。

神仏判然令によって明治期に祭神名が変更され、明治末期より始まった神社合併策によって神社数が激変する県があるため、森岡清美『近代の集落神社と国家統制』、櫻井治男『蘇るムラの神々』の成果には留意した。

4. 研究成果

3年間の研究期間に、祭神別の全国神社分布図を作図できたのは15神(柱)ほどであった。

具体的には白山信仰と日吉信仰関連の神々、素戔鳴尊、大山祇神、天照大神などであり、考察共々論文活字化は終了。それ以外にも稲荷信仰関連の神々、天神信仰、天忍穂耳尊、天兒屋根命、海神関連の神々については神名ごとに全国分布図を作成済みである。

活字化が数柱にとどまった理由としては、多いものでは大山祇神(大山祇命など)のように6100社にものぼったため、一々の神社の由緒に簡単に目を通すだけでも一苦労で、作図とともに莫大な時間を要したためである。さらに、素戔鳴尊のように漢字表記だけでも79とおりという場合(素戔鳴、素戔鳴、須佐之男が大半とはいえ)もあって、検索には慎重さが求められることもあった。

限られた3年間という期間であったが、活字化できたものを中心に、研究成果の概略を以下に記す。

まず、白山信仰を祭神別に再考したことから。白山への登山道がある石川(加賀)・福井(越前)・岐阜(美濃)にある白山信仰関連神社を検索すると、加賀では菊理媛を主祭神として祀る神社が多く、越前では伊弉册尊を、美濃では伊弉諾尊と伊弉册尊そして菊理媛を祀る神社が目につくが、例外も多い。そこで、中世前期以前に創建の神社に限定してその祭神を検出すると、ある傾向を読み取ることができる。つまり、越前には創建の古くして、菊理媛を祀る神社は皆無だということである。さらに、菊理媛を加賀馬場で祭神とするようになるのが早くとも南北朝期であり定着するのが室町期であることを考慮すると、白山信仰の主祭神を菊理媛とするのは疑問である。全国の古い白山神社の中に白山大神、白山大御神とする神社が幾社もあるが、案外古い形を伝えている可能性が高い。延喜式神名帳の加賀国に白山比咩神社と見えることも、「白山比咩」神が本来の形であることを示している。そして、それがまた伊弉册尊なのであろう。このことより、従来通説であった、加賀馬場を中心とした勢力はその信仰圏を北に拡大し、越前馬場は西国へ、美濃馬場は東海地方から関東本面にのびていった、というのは再考されねばならない。もちろん、この論自身これまで論証されたことはない。九州北部に加賀白山比咩神社からの勧請を伝える神社があるほか、愛知県のあるいくつかの寺院には越前馬場からの勧請を伝える神社があり、その時期については慎重に見極める必要がある。地理的な要因から導かれる勘だけを頼りに、当然と考えられてきた通説ではあったが、抜本的に見直されねばなるまい。さらに、越前馬場、加賀馬場のいずれもが江戸期には振るわなかった(加賀は中世後期から)なかで、美濃馬場(石徹白を含めて)を中心とした勢力が全国各地に白山信仰伝播の御師として冬季を中心に出張していたが知られるなか、近時、岡山県にまでその足跡が及んでいることも明らかとなった。これまでは中世にあって、越前側からの影響の蓋然性が高いとされていたのであるが、近世以降には美濃側からの信仰伝播があって、同じ白山信仰とはいっても上塗りされていくのではないのか、という予想ができるのではあるまいか。

次に、大山咋命を通して日吉信仰を再検証した。すでに、日吉神社(日枝、山王神社)の分布図は以前に作製済みで、中世前期を遡るそれについては、由緒等を平凡社の地名辞書や各県神社誌を手懸りに見通しを得ている。その結果、新たに日吉神社等の神社名ではないものの、日吉信仰関連の神社と思われる社を400社ほど検出した。たとえば、福島県郡山市熱海町安子島の大鏡

神社、田村郡喜久田町早稲原の大鐮神社、田村郡船引町大字船引の大鐮矢神社はいずれも大山咋命が祭神で、坂上田村麻呂による戦勝祈願や討伐の故事を創祀としている。大鐮矢神社の祭神大鐮矢大神はすなわち大山咋命であり、田村麻呂が鐮矢を献じて祈願したことに由来する社名である。このように祭神に注目して、新たな日吉信仰の神社を拾うことができた。

素盞鳴尊については『スサノオ信仰事典』（戎光祥社刊）がだされ、問い直されているものの、依然難問である。茂木貞純氏「素盞鳴信仰の展開 神社本庁『平成「祭」データの分析を中心に』」は貴重な成果で、従来の研究を踏まえた上で興味深い指摘をされた。つまり、中国地方の4県鳥取・島根・岡山・広島県では祇園系の神社（八坂神社・八雲神社・須佐神社・素盞鳴神社）が比較的少ないにもかかわらず、祭神に素盞鳴尊を祀る神社が多い、という。これは社名のみならず祭神名に注意を払ったからこそこの指摘である。私（平泉）はそれを受けて、問題の中国地方4県に多い素盞鳴尊を祀る神社のなかに「荒神社」がかなりあることをつきとめた。荒神は、東日本では多く火処の神として祀られており、屋敷神として祀られていることが多いのが中国地方という研究成果もある。ともあれ、ここに「荒神」という名が浮上してきたのあり、鳥取市有富町のあたりの旧村名は荒神谷村であり、それは牛頭天王を祀ることに由来すると説明されている。この神社は現社名が岩淵神社であるが、牛頭天王と素盞鳴尊信仰との関連もさらに突き詰めていく必要があり、必ずしも成案を得ていない。興味深い同様の事例が当地域には多く見出せるようである。素盞鳴尊を祀る神社は先行研究によれば八坂系神社（八坂・八阪・八雲・須佐・素盞鳴・素盞鳴神社）、津島系の神社、氷川神社系統の3種類に分類できるというので、それぞれの神社分布図を作成済みである。前述したように、素盞鳴尊と牛頭天王社との関係には注意を払った。従来通説でも「明治維新を嚆矢とする廃仏毀釈によって、神仏習合色が強かった牛頭天王はスサノオ神に統合されていった」とされている。現在の社名がどうあろうと、通称が牛頭天王、あるいは天王さんであった神社が全国で少なくとも550社はあり、その分布に特色が見られないかも探った。先行研究でも、神社合併策によって天王社という社名が消えてしまった事例が三重県の度会郡などではしばしば拾えるようである（櫻井治男『蘇るムラの神々』）。そして、このような牛頭天王をかつて祀っていた神社では、社名や祭神名はともかく、現在でもそれに由来する祭礼（八岐大蛇を模した神楽や伝承が残っているほか、天王祭などと称している場合がある）があって、『スサノオ信仰事典』が収集し報告して参考になる。

大山祇命（大山祇神）の分布図作成には時間を費やした。大山祇神社（大山積神社）は700社余が全国に鎮座している。それに比して、大山祇命を祀る神社だけで6100社、大山積命（大山積神、大山津見神などとも）を祀るのは960社ほど、数値に大きなひらきがある。分布図からうかがわれることとして、大山積命（大山積神、大山津見神などとも）を祀る神社には、社名からだけではそれとはわからないものが三重県、広島県、群馬県などに多いことを指摘できよう。國學院大学による『現代・神社の信仰分布 その歴史的経緯を考えるために』は、社名を中心にした研究成果であり、そこでは「山神信仰」「三島・大山祇信仰」と分類する優れた見識を示した。ただ、大山祇命を祀っている神社のなかに、実態が限りなく山神信仰に近いものも含まれていることを知ると、再度このあたりの検証が必要と考える。社名変更、神社合併策の影響をさらに見ていきたい。一般には、後世の付会として扱われることが多かったし、分布図を見ても地域的な濃淡は明らかである。新潟県に多いのはよく知られたところだが、九州の大分県また四国の海岸部、東海地方から関東地方の海岸部にも多く大山祇命・大山積命（大山積神、大山津見神などとも）を祀る神社が鎮座していること、関東の山岳部にも実に多く鎮座していることの意味をさらに検証していきたい。

北陸道に限定してではあるが、天照大神を祀る神社分布図を作成、検討した。結論的なことは上記「研究の目的」の部分に記したのでここには概略のみ記したい。石川県では神明神社の数が少なく32社である。新潟県728社、富山県679社、福井県98社とくらべても少ないことは言えよう。しかし、これは神明神社（神明宮・神明社）に限定しているからであって、天照大神を祀る神社は石川県では216社鎮座しているのである。金沢市野町の神明宮は全国七神明宮の一つというし、伊勢信仰なり天照大神への信仰は石川県に古くから根づいてるとみてよい。社名による分布数の比較などから、伊勢信仰が加賀に浸透しきれず、地元の白山信仰勢力と衝突したとみる見解が曲解であることは明らかと言えよう。

なお、研究期間中に津江市日吉大社より委嘱されて、記念祭にあわせて出版された『日吉大社大年表』の中世部分を担当した。すでに昭和17年に当時の職員によって出版されたものを、細部にわたって補訂したものであるが、日吉（山王）信仰に関しても多くの知見を得る機会となった。山梨県大月市の猿橋のたもとに、祠ではあるが山王社が鎮座していることを承知した。天下三奇橋とも称され、その架橋には推古天皇の時代に朝鮮系の帰化人（渡来人）が関与した伝承も残っている名橋である。その「はね橋」には橋脚がなく、両岸よりせり出して架橋するには高度の技術が必要という。仏教東漸とともに伝わったとの伝説は、この肘木構造なるものが寺院建築で用いられていたことなどからも、仏者による技術であることを伺わせている（金沢工業大学教授で、木橋研究の第一人者本田教授談、プータン国などに現在でも多く見られるという）。木造の橋は全てそうだが、耐用年数に限りがあり、約40年ごとに建て替えるか、あるいは大幅な補強が必要である。猿橋の掛け替えの際には、全国各地から猿つかい（つまり猿を用いた大道芸人）の集団が集まってきて協力し、また寄附金を寄せた、という不思議な話が伝えられている。猿を神使としているのは日吉大社であり、橋のたもとに山王社が鎮座しているのも、日吉信仰との関係を暗示している可能性がある。資史料がないため想像に過ぎないが、日吉信仰の勢力拡大や信

仰伝播の背景の一つに、このような土木技術がなんらか関係しているのではなかろうか。とすると白山麓、現在の石川県白山市の手取川上流部には、加賀側の白山信仰に関する最古の文献『白山之記』に見える、一の橋、濁澄橋があり、少なくとも江戸期までは木橋のはね橋であった。日吉信仰と白山信仰とが衝突せずに協調した証拠となる可能性もある。はね橋であり橋脚がなかったことは、江戸期の加賀国絵図(4種)に、いずれも橋下18間などとあって猿橋と同程度であることから容易に推定でき、延暦寺の僧が白山信仰関係者に技術を伝えたことも考えられ、時期も平安末期に遡る可能性がある。

今回の祭神別神社分布図研究では、各県別の神社誌を十分に収集参看することができず、結果的に個々の神社の来歴が判明した神社は地名辞書などに記載があるものにとどまっている。先行研究が指摘するように明治末年から着手された神社合祀の結果、神社数に急激な変化が認められる県として三重県、大阪府、和歌山県などがある一方、そのような変化が少ない県として京都府、宮崎県、奈良県、静岡県、富山県、山梨県、長崎県、青森県などが知られている。急激な神社数の減少、つまりは神社の合併が多く実施された影響であろうか、三重県では日吉神社(山王社)という社名の神社こそ少ないものの、祭神に大山咋命を祀る神社が主要街道沿いを中心に拾うことができ、このことから祭神別神社分布図は有効であることが伺われる。

課題も残った。日吉信仰・白山信仰を検証した際もそうであったが、信仰伝播の経路をたどるとなれば、古い創建の社を検出しおおまかなルートを想定する必要がある。神社が検出されたとはいえ大部分は近世以降創建の神社であって、それらを除外したうえで検討を進めた。中世前期までに創建された神社を地名事典や各県神社誌などから抜き出す作業には時間を費やしたものの、日吉神社・白山神社とも全国でそれぞれ2000社ほどであったから、可能であった。今回、大山祇命のように6000社を超えとなると作業は難航した。表記が多数ある場合には、その回数検索すれば祭神別神社分布図としては完成する。しかし、そのなかから来歴の古い神社を見つけ出すことは厄介な作業であった。これまでの社名による場合は案外スムーズにいったが、神社名と祭神名を確認し、創建が中世前期以前に遡る神社を探すことは容易ではない。村名がそのまま神社名になっているような場合、神社合併策のためであろうか多くの祭神を配している例がほとんどで、本来の祭神ないしはそこに配された神が古いことをどのように確定していくかは一考を要することであった。一応、通称や別称を参考にしたが、やはり由緒や資史料に丹念に当たらねばならず、不十分な部分が残ったことも事実である。

祭神別神社分布図作成の作業と、祭神そのものの研究とのどちらを先に行うかも問題であった。素盞鳴尊については先行研究があったため、それを踏まえての立論が可能であった。牛頭天王については明治期の神仏判然令によって名前が改められるなど、資料上より消えかかっているわけで、むしろ祭礼等によって復元していくことが求められた。「荒神」について触れたものの、社名であれ神名であれ、その意味するところは多岐にわたっており判断がつかない場合が少なくなかった。神社が検出され、それを分布図の形で提供することはできたが、信仰伝播の道筋をたどるところまではいっていないのが実状で、作業そのものに優先順位が必要かとも思われた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 平泉隆房	4. 巻 20
2. 論文標題 中世前期における白山信仰日吉信仰全国伝播についての一考察（五） - 畿内・山陽道を中心として・補論 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 金沢工業大学日本学研究所 『日本学研究』	6. 最初と最後の頁 3-79
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 平泉隆房	4. 巻 66
2. 論文標題 白山信仰をめぐる諸問題の概要	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 藝林	6. 最初と最後の頁 31 - 54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計1件

1. 著者名 日吉大社大年表編集委員会	4. 発行年 2018年
2. 出版社 思文閣出版	5. 総ページ数 210
3. 書名 日吉大社大年表	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----